

令和2年11月 市長定例記者会見

2020年11月2日(月)

午後1時30分 開始

【秘書広報課長補佐】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和2年11月市長定例記者会見を始めます。

本日の会見の進行につきまして、お手元の次第のとおり、最初に市長の挨拶、その後、事業発表をいたします。質問につきましては、事業発表についてからお願いしたいと思います。事業発表に係る質疑応答終了の後に、次第の3番目、フリーの質疑応答へ進行したいと思っております。

なお、ご質問の際は、お手数ですが、まず挙手をお願いいたします。そしてご自席のマイクのスイッチを入れていただきまして、ご質問の後はお切りいただきますようお願い申し上げます。

終了は14時30分を予定しております。ご協力のほどよろしくをお願いいたします。

それでは、市長、よろしくをお願いいたします。

【市長】 では、11月の定例記者会見です。どうぞよろしくをお願いいたします。

コロナの中の生活ということで、大分皆さんも慣れてきたのかなということをおもいますが、東京のほうにずっと行かずに控えておりましたけれども、先々週ぐらいから東京に行ってまいりました。ちょっと行くのはドキドキしますが、行きますと結構皆さん要望活動なんか来ていますので、やっぱり行ってしっかりと要望活動、また自分たちの求めているものというのを発信してこないといけないなということを改めて感じたところでございます。

それからまた、いろんなイベントを開始しております。10月24日、25日につきましては、駅西地区のゾーンにおきましてイベントをやりまして、また昨日、11月1日につきましては国道8号空間利用のイベント、実証実験をさせていただきました。新しい生活様式の中で、少しずつ外に出る工夫というのをしていかななくてはいけないというふうに思っております。

明日、11月3日につきましては、ムゼウムのリニューアルということと鉄道フェスティバルを行うわけですが、その後には人道ウィークということで8日まで続けてやります。しっかりとコロナ対策を行った上での行事とイベントということで進めていきたいというふうに思っております。

また、ムゼウムにつきましては、敦賀から世界に誇れるような施設になることを目指しております。その最初の第一歩ということで、非常に意義ある1日になるというふうに考えておりますので、どうかよろしくをお願いいたします。

【秘書広報課長補佐】 続きまして、事業発表をお願いいたします。

【市長】 発表項目につきましては、項目は1項目のみでございます。

令和2年度除雪排雪計画についてということで、今年度の除雪排雪は11月15日から翌年3月31日までを除雪期間として、降雪時における交通の確保と市民生活の安全を図るために敦賀市除雪排雪計画に基づき実施いたします。

除雪作業は、敦賀市土木協会、敦賀市管工事組合、造園組合、その他協力事業者へ委託

し実施いたします。

車道除雪は、通常の場合、積雪深が10センチに達した場合に出動し、深夜から早朝にかけて実施します。通勤通学の時間帯に間に合うように実施しますが、大雪や明け方の降雪によっては作業が遅れる場合もありますので、どうかご了承くださいと思います。なお、歩道除雪は積雪深が20センチに達した時点で取りかかる予定です。

排雪場所は、和久野橋下流（黒河川左岸）及び敦賀市運動公園西側駐車場の2か所を指定しますが、緊急時のために昭和町1丁目（笹の川左岸）及び松原運動場も合わせて指定させていただきます。

発表項目は以上です。

【秘書広報課長補佐】 それでは、ただいま発表いたしました項目につきまして質問をお受けしたいと思います。最初に幹事社さんのほうからお願いいたします。

【記者】 除雪計画についてなんですけれども、この除雪の体制というのは、去年と比較して強化されているか、それとも変わらないのか。そのあたりを教えてください。

【建設部長】 まず数字的な話を申し上げます。除雪路線の延長につきましては、令和元年度に比べまして令和2年度では385.2kmということで約50m増加しております。路線数につきましては1845路線、4路線増加しております。歩道ですが42.8kmということで、これは増減なし。路線数は39路線、これも増減なしでございます。

続きまして、除雪の機械でございますが、令和2年度は177台ということで2台増えてございます。

最後に除雪業者数でございますが、昨年と比較しますと2社減ということで合計74社というような状況でございます。

以上でございます。

【記者】 確認なんですけど、表記上175台となっておりますが、これは177台の間違いですか。

【建設部長】 申し訳ございません。177台ということで、よろしくをお願いいたします。

【記者】 昨年が175台だったということで、2台増加ということですか。

【建設部長】 そうです。2台増えたということでございます。

【記者】 ちなみに昨年の出動回数というか、暖冬だった記憶があるんですが、どうでしょう、そういうところの部分というのは去年はどんな感じだったか分かりますでしょうか。

【建設部長】 昨年の実績で申し上げます。除雪作業の日数ですが、昨年度は2日間ということでございます。

以上でございます。

【記者】 ありがとうございます。

【秘書広報課長補佐】 ほかに幹事社さん、いかがでしょうか。

それでは、各社お伺いいたします。発表項目につきまして質問がございましたら挙手のほうをお願いいたします。

【記者】 先ほどの幹事社さんの質問に関連しまして、プラス2台はどの部分がプラス2台なのかという点が1点。もう1点は、4路線増で50m増ということで間違いはないですかという確認です。お願いします。

【建設部長】 数字的にはそれで間違いございません。路線数、延長は、今申し上げたとおりでございます。

あと具体的な除雪機械の増減の話を申し上げますと、除雪ドーザがプラス1台、タイヤショベルがプラス1台ということで、プラス2台という内訳でございます。

以上でございます。

50mで4路線増という中は、申し上げますと、産業団地の分の路線が増えたということもございまして、岡山松陵線ができました。その中で、もともと市道であったところが岡山松陵線になった、県道になったというところで減も生じたというところで、総じてプラス50mというところでございます。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

それでは、次第の3番目、フリーの質疑応答へ行きたいと思っております。これも幹事社さんのほうからお願いいたします。

【記者】 今、規制庁というか規制委員会が日本原電の例の活断層のデータの手書き問題に関して、方針で、今までは安全審査そのものについてきちんとやっているかどうかという話でしたが、さらに踏み込んで、そもそも組織体制として、こういうデータの手書きが起きるのはどうなのかということで、別の部署の保安規定とかそういうものを担当する法令関係の詳しい人たちが原電に立入りも含めて調査をしていくというふうにされていますけれども、このように日本原電の会社の体制そのものが問われているという事態について、市長はどう受け止めているかということをお尋ねします。

【市長】 敦賀2号機の審査状況というところで、審査手続から別個に品質保証体制に関わるところで審査していくということで、ハードとソフトと分けたのかなというふうに感じています。ですから、原子力規制検査の中で確認していくものと、品質保証で組織がきちんとなっているかどうかということを見ようとしているんだろうというふうに思っていますので、それ自体はそれでいいんじゃないかなというふうに思っています。

【記者】 それは一般的に行われることではなくて、異例の、体制というか体制そのものに踏み込んで調査するという点でいったら、今回の関電の金品受領問題、それに出発の質は違いますけれども、組織としての体制が問われるという点では共通しているようなところが見えるんですけれども、その点、市長はどのように見ていこうかなというふうに思っていますか。

【市長】 関電さんと一緒だという捉え方はしていないんですけれども、ですから適合性審査で発電所自体の安全性ということは確認していかなくてはいけない。ただ、データの数字の手書きとか意思疎通の不適合とか、そういうところに関しては、きちんとした、正しいものを出してくる体制というのは必要になってくるでしょう。そういう品質保証体制に関して、もう一つ踏み込んで検査しましょうというか、体制を整えましょうということになったんだと思いますので、そこまでやりながら、こっちはハード的な部分の検査というはできないでしょうから、分けたというふうな感覚として捉えているんですけれども。品質保証体制という会社の体制自体がちゃんと意思疎通ができるような体制。また、そのデータに対してきちんと判断しましょうという2つの部署に分かれたというふうに思っています。

【記者】 原子力関係で関連してなんですけれども、先日、加藤官房長官がリプレースについては現状考えていないというふうに発言があったかと思うんですけれども、そのことに対しての市長の受け止めをお答えください。

【市長】 難しいですね。菅総理は、CO₂排出ゼロを目指していくというふうにおっしゃっていますので、その中で当然、今の技術、技術革新がある程度あったとしても原子力というのは必要になってくるだろうというふうに捉えています。その中で、原子力が必要なものを考えていくと、新增設、リプレースはないとそこは達成しないだろうというふうに捉えているんですけども、一方で、官房長官が違うことをおっしゃっていますので、その違いというのはどういうふうに判断していいのかというのは、私の中でははっきり分からないです。

ただ、総理がおっしゃっていることですから、そちらのほうで判断していけば、やはり新增設、リプレースというのは原子力発電所の安全性がより高いですし熱効率もいいわけですから、そういうところを目指していくべきだというふうに思います。

【記者】 2050年に向けても、脱炭素というかそれを進めていくという宣言が出ましたから、そういうことも考えると、官房長官のこの時点での発言ということと、将来を見据えた上での原発の在り方ということを考えて、やはり総理の意向というほうが現実的なかなというような考え方でしょうか。

【市長】 そうですね。2050年に向けてという部分では、CO₂の排出ゼロを目指していけば当然必要になりましょうし、新增設、リプレースを最初にやるんじゃなくて、再稼働から進めていきますよという考え方のすみ分けなのかもしれませんし、その真意は私には分からないです。

【記者】 その流れでお聞きしますが、敦賀市の話ではないですけども、美浜町と高浜町で40年超の原発が再稼働というところの段階を経ているような状態にあるかと思えます。そこで、それぞれの町のスピードというか動きが町によって違うのかなという感じが見受けられるんですけども、高浜町については、こちらから見ると少し前のめり感もあるような進め方があるような感じもしますし、美浜町も順を追いながらも再稼働に向けて進んでいるのかなというふうに感じるんですけども。そのあたりは市長というか、立地地域代表というか、そういうところのお立場も含めて、どういうふうに捉えていらっしゃいますか。

【市長】 関西電力に関しては、金品受領問題がありましたので、その組織体制、うみ出しというのが一応できましたよという報告がこの間ありましたので、ある程度そういうことは進んでいるというふうに思います。その中で、次にやらなくてはいけないのは2020年を念頭にということで、中間貯蔵の候補地ということを示すということがありますので、それを示した上で次のステップを考えるべきだというふうに考えています。

ですから、そのステップを間違いないということを確認していらっしゃって準備を進めていらっしゃるのかどうか分かりませんが、それが見えて初めて前に進めていけるんじゃないかなというふうに私は感じています。

【記者】 そう考えますと、それぞれの町の首長からは、特に中間貯蔵のことについての言及というのは今のところないのかなというふうな感じがするんですけども、知事がそういうふうにおっしゃっている以上、基本的には中間貯蔵施設がどこにということを示さない限りは前に進まないというか進められないんじゃないかというようなお考えでしょうか。

【市長】 やっぱり地元の信頼関係を高めて築いていこうとしますと、一つは金品受領の

体制づくりというのが一つ報告が上がりました。それは、これからまた継続して詰めなくてはいけないことでしょうけれども、次に中間貯蔵施設をどこにするかということが示されて、それでさらに信頼関係が増すということがステップとして必要だろうというふうに思っています。

【記者】 そう考えると、高浜町はちょっと早いかなという感じは市長の中でもあられるのでしょうか。

【市長】 それぞれの首長さんは何かいろんなものを考えて動いていらっしゃると思いますので、そのご事情は私は分からないので、そこについてはコメントは控えさせていただきます。

【記者】 ありがとうございます。

北陸新幹線の建設工事についてなんですけれども、この間、与党PTで細田座長が少し遅れていますというふうなことが、はっきり申し上げられたということがあったかと思えます。立地地域というか、工事が進んでいる終着点でもある敦賀というところで、鉄道・運輸機構から直接そういう遅れについて何か説明とかは既にあったのかどうかということと、もしなければ、そのことが降ってきたことについてどう受け止められているかをお答えいただけますか。

【市長】 もともと敦賀までの延伸というのは3年前倒し、さらに2年前倒しとか言いながら、ぎりぎりの日程で詰めてきていただいているのは十分理解しているんです。ですから厳しい日程の中であることは間違いありませんけれども、2023年春開業ということは国が約束したことです。しっかりとそれに基づいて進めていただけるものだというふうに思っておりますし、それに従って私ども沿線市町は、いろんな日程を組んで合わせているわけですから、そこで違う日程になると言われてもどうしようもないことが起きてしまいますので、約束していただいたことはしっかりと進めていただけるものだというふうに信じております。

【記者】 ありがとうございます。

【秘書広報課長補佐】 それでは、各社お伺いいたします。ご質問がございましたら挙手のほうをお願いいたします。

【記者】 私も原子力関係で幾つか、特に、もんじゅの同じ敷地内に建つ試験研究炉の関連で、これまでと重複してしまう部分があるんですが、改めてお聞かせください。

まず1つ目が、もんじゅの試験研究炉の計画が今年に入って、炉型も決まったりですか前進があったわけですが、今回新しく建つ試験研究炉自体がこれまでの例えばもんじゅと比較すると、もんじゅのような炉ではないので、雇用が減ったりですとか、あるいは交付金の関連でもかなり減額が今のところ予想されていますけれども、この試験研究炉が特に地域経済と関連しまして、期待あるいは現時点で国に対する注文といいますか求めたいことなどがありましたら、改めてお聞かせいただければと思います。

【市長】 前にもお答えしている部分になりますけれども、試験研究炉の規模も決まりましたので、そういう設計に進んでいかれるんでしょうけれども、私どもがまず求めているのは、地域経済にどれだけのメリットがあるのか、また雇用がどのくらいあるのかということが大事なところですので、そこを早く示してほしいということをお願いしています。

ですから、炉が決まりました、よかったねじゃなくて、それによってどういう経済効果、

また人の動きがどういうふうになるんですかということを知りたいなど。もんじゅの廃炉のときをお願いして約束していただいているのは、1000人の雇用を当面の間は維持するという約束をいただいていますので、1000人の雇用の維持が10年程度は約束できるということですが、廃炉ということになってきますと、将来的には人数が減っていくわけですから、その間にいかに新しい産業を興して雇用を創出していくかということが私どもの目的ですし、それに対しては国も協力してほしいということを常々お願いしていますので、その中で試験研究炉がどういう役割を果たすのかということを示していただきたいというふうに思っています。

【記者】 今回の文科省の作業部会などの絞り込みのほうで、1万キロワット未満という形の中出力炉というふうに決まりましたけれども、これは市長ご自身のお気持ちとしては、例えば本来であれば、中出力炉で、それぐらいの炉をつくることのできた京都のKUR程度の産業分野でも参加できるような炉ができて、よかったという評価なのか、あるいは本来であればもんじゅと同じような大型の炉が本当でしたら地元経済のためには必要だったんですけれども、妥協案として中出力炉でいいのか。そうした炉型の評価についてはどのように考えておられますか。

【市長】 まず、もんじゅについては、私たちは、国家政策として核燃料サイクルの中でももんじゅが必要だということの中で協力してきたわけです。ですから、試験研究炉について国の位置づけかどうかというのは、なかなか示しにくいだろうなというふうに思っていますので、そこについては求めていけないのかもしれないなと思いつつ、そういう方向性はしていきたいと思っています。

ただ、中出力炉というのは、あそこの敷地の中で造れる一番大きいものだというふうに聞いていますし、その用途もいろんな用途が、産業にしても使えるというふうに聞いていますので、用途が多いほうが使い勝手もいでしょうし、経済的な活性化にもつながっていくんじゃないか。そこで新しい産業ができたりという意味ですけれども。ですから、中出力炉は、私どもが求めていた一番使い勝手がよくて経済につながっていくものとしては近いものだというふうには思います。

【記者】 ありがとうございます。

一方で、9月の原子力発電所特別委員会のほうでも議員の方々に説明がありましたけれども、交付金の関連で、これまでのもんじゅと同じようなものは見込めないということで、例えば杉本知事もこの前、エネ庁の長官が来られたときに、使いやすい交付金、ある意味フレキシブルなといいますか、そうしたような交付金の制度を求めていましたけれども、新しい研究炉に関連して、例えば交付金にこういうことをしてほしいですか、あるいはこれまでも廃炉のほうで、廃炉期間が終わるまでの持続を求めているのは承知しているんですけれども、何か交付金の関係で国に求めることなどありますでしょうか。

【市長】 さっきも言いましたけれども、もんじゅについては、交付金があるから手を挙げたとかそういうものではなくて、まず国策であるということで、核燃料サイクルの中で大切だということで地元は引き受けたわけですね。ですから当時の人たちも、今から敦賀では夢のようなバラ色の研究が始まるんだみたいなイメージで受け入れたはずなんです。ですからその後には交付金がついてきたというイメージだと思います。

今、試験研究炉につきましては、その部分で、どんなものを求めていくかということ

なくて、私らが求めているのは地域の活性化、雇用ということをお願いしたいというふう
に思っていますので、幾らくれないと同意せんとか、そういう話ではないというふうと思
っています。

【記者】 ありがとうございます。

また関連してなんですけれども、私が例えば敦賀半島などを歩いているいろいろな方のお声
を聞いていると、そうした研究炉に期待をする声というものが本当に多いというのが実感
で感じています。ただ、一方で、また多いなというふうに感じているのは、それこそ敦賀
市、県のほうでもエネルギー計画を立てて、新しい産業を育てようというふうにしてい
るし、自分のほうも新しい産業のほうに期待をかけたいという方がいる。そうした中で、結
局、試験研究炉が来てしまうと、原発に頼り切りといいますか、そういう状況になってし
まうのではないかというような危惧を持たれる方も結構いまして、そうした方の声には例
えばどういうふうにお応えになれますでしょうか。

【市長】 原子力の交付金に頼り切りになってしまうんじゃないかということをお心配され
ているということですかね。

そういうふうにはならないというふうに思います。試験研究炉では。

【記者】 それは額的な問題ということですか。

【市長】 そうですね。今考えられる、交付金もあるんでしょうけれども、原子力がある
からたくさんの人たちを雇用、何百人、何千人という雇用があるというふうにはならな
いんじゃないかというふうに思います。

【記者】 そうすると、やはり試験研究炉のほうに期待するのは、新たな産業として興す、
いろんなある意味、選択肢の中の一つとして期待する。どういった部分が一番大きい期待
になるのでしょうか。

【市長】 まずそれを国に示してほしいということをお願ひしているんです。私のほう
からそれを言ったら、それでいいのかみたいな話になってしまうので、ちょっと避けた
いんですけれども、雇用の創出とか、学生さんが来たりしますからそこで居ついてもら
ったりとか、新しい研究が始まって海外とのつながりができたりとか、その辺がどうな
っていくか分かりませんが、そういうことを示していただきたいというふうに思います。

【記者】 逆に、今のお言葉を聞き直すと、現時点では試験研究炉によるどういった雇用
が創出できるのかというものが、地元の方では見えてきていないので、国のほうに説
明を求めたいということでもよろしいのでしょうか。

【市長】 今は試験研究炉の炉型が決まったばかりなんです。ですから、そういうと
ころが早くしっかりと示してほしいということをお願ひしている状況ですので、どうい
うものが示されるかというのを私どもは待ったほうがいいと思います。

【記者】 ありがとうございます。

あと、敦賀半島全体のといいますか、原発の状況に関して、先ほど敦賀の審査の話な
どもありましたけれども、敦賀は50年の原子力を受け入れてきた歴史があるわけですけれ
ども、現時点では敦賀原発のほうは規制委員会で審査はしていますけれども、いつ再稼働
というような日程も今のところ立っておらず、もんじゅも廃炉の状況なので、今現在、原
発、原子力関連の施設は動いていないわけですけれども、ある意味で、脱原発に非常に近
い状態というものが続いているわけです。そうした中で、もちろん新しい産業などを進め

ようとされているんだと思うんですが、改めてお聞きしますが、例えば、敦賀市として脱原発という道というものは考えられないものなのでしょうか。

【市長】 まだ廃炉もありますので、そういうことは考えていません。

【記者】 例えば敦賀市の場合、基幹産業として一緒に原子力というものを育ててきたといったような自負もあるのではないかと思っているんですけども、例えば、交付金の延長期間に関してですけども、今現在の段階で、例えば脱原発というものはできないのか、あるいは、やろうと思えばできるけれども選択肢としてはそれを取らないといったようなスタンスなのかということ、一体どちらになりますでしょうか。

【市長】 取りあえず今は廃炉もありますので、そういうことは考えておりません。

【記者】 ありがとうございます。

【記者】 昨日、国道8号線の歩行空間の利活用ということで、社会実験ということで、私も取材をさせていただきまして、かなり多くの方が出られていたなというふうな印象を受けたんですけども、ちょっと意地悪な言い方をすると、コロナ禍でもあったので、ああいうふうに屋外で出ているようなイベントがなかったというところもあって出てきた部分もあるのかなというふうにも思ったんですけども。逆に、あのぐらいの感じの週末というか、そういうふうな歩き方とかができるのが継続できれば、いい環境になってくるのかなというふうにも思った次第なんですけれども、ああいうような感じの雰囲気(newspaper)が新幹線開業に向けてずっと継続的になっていくためには、今後どういうことが必要になってくるかなというふうに、昨日一日の話ですけども、市長もご自身で見られてどうだったかなと思ひまして。

【市長】 そうですね。昨日はたくさんの方が出ていらっちゃって、売り手さんも買い手さんにもここにきて、目ですけども、マスクで見えないんですけども、ここにきて楽しそうに回遊されていたので、本当によかったなという気持ちだったんですけども、おっしゃるように少し密になった部分もあったかもしれません。

24日、25日のときには、ちょうどいい感じだったんでしょうけれども、出てきているところに見てみたい、買ってみたいというのは我慢し切れない部分があるんだろうというふうに思いますので、昨日歩いていたら言われたのは、月に1回ぐらいこんなものがあるといいのになとか言われたんですけども、son(only)だけではできないでしょうけれども、きっかけづくりにはなったと思いますし、全く出ないというのは非常に辛い部分がありますから、ちょっと出てみて、大丈夫だったなというのが繰り返し感じることができれば出やすくなるんじゃないかなというふうに思いますので。当然マスクをして手洗いしてということになりますけれども、新しい生活様式の中で、いかに外に出ていくか、経済活動をやっていくかということの一つの実験にはなったんじゃないかと思ひます。

明日またありますので、どのぐらいの規模がというのがありますけれども、同じぐらいの出方であってくればありがたいなというふうに思ひます。

【記者】 コロナ禍がどれだけ続くかというのは、ちょっと分からないところもあるんですけども、そこら辺の対策というのは頭に置きつつも、もしそれが今よりはずっと落ち着いた状態になったとして、そうならば新幹線開業に向けては、ああいうふうに歩行空間ができたからこそ、週末なりなんんりのときには普通に人が出ているというか、あそこに行けば何かがあるんじゃないかみたいな、そういうふうな出方が出てくれば、何か観光客

も含めて歩きやすい環境になるというか、そういう受け皿づくりにもなっていくんじゃないかなと思ったりもするんですが。そういうふうに機運というところも含めて、あとはハード面というか、出やすさというか、出店しやすさというか、そういうところをやっていくためには、市としては今後それを継続させていくためにはどうするのがいいなというふうに今の時点で思っていると思いますでしょうか。

【市長】 出店のしやすさという部分については、市道、国道、それぞれ別々に管理がありますので、それを一括して受け付けられるような仕掛けをつくらうということで今準備しています。そうすると、いろんなことをしたい人も簡単にできるんじゃないかなと思っていますし、もう一つ、昨日気がついたのは、顔ぶれが若いなというふうに思いましたので、若い人が外に出て活動したいというところがあるでしょうから、そういうところを皆さんの活動をいかに支援していくかということになるうと思いますので、前から言っていますように、敦賀市は黒子として応援できたらいいなというふうに思います。

あとは、都会の人たちの中で、野外でいろんなことをしている人がいますので、ライブとかしている人もいますので、そういう人たちが来れるような空間になったらいいなということで、そういう仕掛けもできたらいいなということで、これからですけれども、そういう仕掛けをしていきたいと思います。

【記者】 今の他社の質問に関連してですけれども、先週の24日、25日の駅西の社会実験と、昨日の国8の利活用について、それぞれ成果と、そして今後の課題というか、そういったものを教えていただけたらと思います。

【都市整備部長】 駅前の社会実験から、昨日は国8ということで、社会実験をさせていただきました。それぞれ目的と意義が微妙に違っているんですけども、まず駅西の社会実験については、今回、駅西、駅前から気比神宮、そして金ヶ崎につながるというふうな流れを最初つくりたかったわけなんですけれども、もう少しうまく最初、1番バッターとしては2番バッター、3番バッターにつなぐイメージで、一連の流れを最初のイベントでつくれたらよかったのかなというふうに感じているところでございます。

なお、社会実験では、ご意見等をかなりいただきましたので、それについては我々手応えを感じておりまして、それをしっかり公園設計、広場設計に反映してまいりたいと考えているところでございます。

あとは、SNSとかで、この社会実験の意義を知っている人は、こういう駅前になるんだと想像しながら周遊していただいたり買物をしていただいたりしたんですけども、ふらりと来た老夫婦であったり、目的をあまり理解しないで来た人たちにも、こういう実験なんだよというところをうまく会場で説明できたらよかったかなと。そういうふうに駅西の社会実験では感じました。

国8につきましては、昨日かなりの人に来ていただいたわけなんですけれども、ちょっと気になったのが、トイレの問題であったり、ごみの片づけ等々も、もう少しこれから社会実験等を重ねていく上でうまく機能させていけたらいいなというふうなところを感じておりました。

また今回、イベントづかい、つくって、次に使ってみるという段階は来たんですけども、次、ふだん使いという点で、さらなる次にステップアップするにはどういった仕掛けがいいのかなというところが今後の課題かと感じているところでございます。

以上です。

【記者】 駅西から金ケ崎にかけてという一連の流れなんですけれども、実際に私も結構歩いてみて思うのが、ちょっと遠いかなというところがあって、初日というか駅西のときには、例えば自転車、シェアサイクルを紹介するブースがあったりしたわけなんですけれども、そういったところをもう少しPRしていかないと、さすがに歩いて全部というのはなかなか難しい人もいるのかなと思ったので、その辺はどうでしょうか。

【都市整備部長】 これから氣比神宮、あるいは金ケ崎に通じる主動線の中で、二次交通をどう整備していくかというのがまさに課題でございまして、氣比神宮については、都会の人であれば十分歩くよというふうな話をシンポジウムの講師の先生方もおっしゃっていた中で、さらにもう一歩先の金ケ崎という点では、もう少し駅へ降りた段階で、周遊バスであったり、あるいはレンタサイクル、カーシェア、そのあたりをうまく敦賀を初めて訪れた方にも分かるように、観光政策、交通政策を総合的にまとめ上げていかなければならないなと感じておるところでございます。

以上です。

【市長】 ぐるっと周遊バスがあって、路線の変更をして30分で一回りできるような形にしましたので、大分使いやすくなったのかなと思いますけれども。金沢のほうも15分置きにそういうのが右回り、左回りが出ていますから、そこまではできなくても、近いものとしてぐるっと回るバスが要るんだろうと。中の議論になりますけれども、そのときに、行った道を帰ってこないと帰ってこれると分らんのかな、どうなんやろうという議論もありますけれども、そういうところで開業に向けて二次交通、バスについても、レンタサイクルプラスそういうことも考えていきたいというふうに思います。

【記者】 僕から最後ですけれども、市長に質問なんですけれども、24日、25日の駅西と昨日の国8へ行かれて、どのような未来を描けたというか、どのような感想をお持ちになられたでしょうか。

【市長】 正直なところを言うと、24日、25日のイベントについては、絵では見るんですけども、どういうふうになるのかというのがいまいちイメージが湧かなかったんですけども、あそこにお店を出していただいたり歩き回ることによって、規模感も分かって、この辺にこういうのができるんだなというのが改めて感じられたので、市民の皆さんもそういうイメージが湧いたんじゃないかなと思いますし、これをこういうふうにしたほうがいいんじゃないかという次のステップについても考えることができる実験になったんじゃないかというふうに思いました。

昨日の1日のイベントについては、本当にたくさんの皆さんが見えていたので、みんな、イベントとかにぎわいに飢えていたんだなというのはしみじみと感じましたので、コロナ禍にあっても何かアクションをしていかないと、なかなか堪えられない時期が、また堪えられない人たちも来るんじゃないかと思いますので、コロナ禍におけるにぎわいというのが必要だと思いましたので、工夫してやっていきたいというふうに思いました。

【記者】 国道8号に関連してなんですけど、かなりきれいに整備されて、歩きたくなるようなところにはなったなとは思っています。ただ、いつも問題を感じるのは、滋賀県側から国道8号にかけて新しくなったところを入る手前で、白銀町の交差点ですね。ここで特に土日、あるいは夕方、ボトルネックが生じていて、すごい渋滞が生じているんですね。ひ

どいときにはプラザ萬象ぐらいの前まで、あるいは木の芽川から下に、線路の反対側に行く路線があるんですけども、そこの信号ぐらいまで、ずらっとつながっているということがあるんですね。

これは敦賀市の問題ではなくて国土交通省の問題なのかもしれませんが、まずそういった問題を認識しているのかどうかということと、もし認識しているならば、今後どういった解消を図っていく道筋を考えているのかということを質問させていただきます。

【市長】 渋滞していることは知っていますけれども、朝の渋滞と夕方の渋滞というのはそこだけではなくて、いろんな場所にあるんですけども、例えば東洋紡さんであれば、駐車場に来るときに右折をしないように、出勤のときに、家から来るときに、左側にお互いに止めるようにして渋滞を緩和しようという努力もされていたりしますし、長沢の交差点のところで渋滞が発生していたんですけども、そこについては信号を長くすることで、はける車を多くしましょうというので、はいたりしていますので、深刻な渋滞ではないというふうに理解しているんです。ですから深刻な事態になってきますと、信号の時間を変えたり、また何らかの右折レーンをつくったりとか、そういうことをしていかななくてはならないと思いますけれども、今その部分については特に何も考えておりません。

ただ、あそこの曲がっている部分については、工事して、できるだけ直進性ができる交差点に今から変わる予定です。

【記者】 というのは、私、あそこのすぐ近くに住んでいて、夕方はあそこ通れないんです、はっきり言って。結局、回り道をして狭いところを行かざるを得ないので、それは果たしていいのかということと、見ていると右折車が1台でもあると直進車が進めないというような状態になっているので、もうちょっと右折レーンをしっかり設けるとか、あるいは直進車あるいは左折車が右折車の待機している場所をスルーして前に進める。そういったちょっとした工夫をすれば、あそこは解消できるはずだと思うんですけども、なぜなのかなと。

【都市整備部長】 東洋紡のほうから北進、国8のほうを真っすぐ入ってきますと、かなり渋滞で、私も昨日イベントに行こうとして、東洋紡の前あたりからずっと並んでいたわけなんですけれども。改良点は2ポイントございまして、白銀交差点から木の芽川あたりまで国道8号線が工事をして拡幅されてスムーズに流れるようになるので、右折による滞留がしっかり通れるというようなところは1点改良ができると思います。

そしてもう1点なんですけれども、これは将来的な計画なんですけれども、市道171号線といいまして、ちょうど木の芽川の手前を日本ピーエスさん、JX金属さんに入る道がございまして、それを歩道つきに拡幅してしっかりとした道路にしていきたいというのは現在福井県のほうに要望しているところでございます。そういった白銀交差点、そして171号線との交差点でしっかり右折だまりが確保できれば、北進する国8の渋滞も今よりは緩和されるのかなと考えているところでございますので、そのあたり早くよくなればいいなと市民も感じているかと思えます。

以上です。

【記者】 明日、新しいムゼウムが開館するというので、改めてお伺いできればと思うんですが、展示物の目玉、何が一体目玉なのかというふうにお考えなのかということも改めてお伺いしたいなというのが一つありまして。もう一つ、昨年11月にジャーナリストの

松本照男さんが寄贈したポーランド孤児に関する資料の現在の調査の進捗と今後の活用方針等についてお伺いできればと思います。

【副市長】 子供にも分かりやすいようにということで、アニメ形式で、いかに孤児になったか、どのような苦勞をして日本に来て、敦賀の市民がどんなふうにもてなしたか。これはユダヤ難民も一緒ですけども。いわゆる平和教育施設でございますので、そういった点に配慮して展示を行ったというのがございます。

それと、これもこれまでも市長が申し上げていますが、教育施設ということで、子供さんも多く来られるということで、英語と日本語の解説がついているんですけども、英語のほうが上にあるんですね。日本語は下なんですね。通常、逆の場合も結構多いんですけども、そういったところがちょっと工夫させていただいたところで、あと展示物も今後さらにいいものが展示できると思いますし、場合によってはサプライズもあるかもしれません。

今集めている最中ございまして、そういうところですかね。

とにかく、ゆっくりと、しっかりと勉強というか、いろいろと見ることができるようになったというのが一番の目玉じゃないかなというふうに思います。

【市長】 目玉ですけども、ポーランド孤児の少女が日記をつけていて、日本の兵隊さんが写っている手帳があるんですけども。今だと戦争の象徴みたいに感じますけれども、ポーランド孤児にとってみれば自分たちを助けてくれた人たちということで、大事にしていたのかなというのが私の中ではすごく心に残る目玉なんです。

【人道の港発信室長】 松本さんとタイス先生からご提供いただいた資料につきまして、今回の新ムゼウムの展示でも、市長からもございましたような日記であるとか、それ以外にも当時、大正時代に日本で発行されていた様々なポーランド関連の情報誌のようなものを全てデジタルアーカイブ化したものを皆さんにご紹介できるようにさせていただいたところです。

さらに、当時の子供たちの写真も一部、企画展のほうでご紹介させていただくほか、まだまだ提供いただいた資料があまりにも多過ぎまして、正直なところ。中のポーランド語の内容の解析であるとか、そういったものは引き続き我々も関係機関のご協力をいただいて中身の分析を進めて、これから企画展のほうに活用させていただくということを考えております。

以上です。

【記者】 関連してなんですけれども、新しいムゼウムは教育施設として年間7万人の来館を目標とされている中で、教育旅行の誘致というのは大きなテーマになってくると重ね重ね伺っているわけですけども、大体7万人のうちどの程度を教育旅行で子供たちに見てもらいたい、来てほしいなというふうにお考えか。よろしいですか。

【副市長】 8万5000と言っていたときに、1万5000というような数字を出してきております。そうした中で、人道の港発信室の職員が例えば県内の校長会とかに行って説明をさせていただいたり、あるいは観光協会の職員さんが県外の学校等にPRに行ったり、それから「教育旅行」という冊子がございます。月刊だったと思いますけれども。そういった冊子に掲載したりして、集客と申しますか、来ていただけるようにということで働きかけをしているところでございます。

【市長】 修学旅行については非常にマッチングするのではないかなと思っています。

【記者】 全体のどの程度を教育旅行で来てほしいというような想定はあるのでしょうか。

【市長】 8万5000のうちの1万5000でしたけれども、7万でも1万5000ぐらいは来ていただきたいなと思います。

【記者】 関連してなんですけれども、ムゼウムで。教育施設の一面としての意味合いというのを伺って、確かに興味ある人にとってみれば割と見応えのある資料なのかなというふうには思うんですけれども。ただ、金ヶ崎観光の核となる施設でもあると思うので、ニッチなユダヤ難民とか敦賀とか、興味がなかった人たちも呼び込んでくるような、そういうパイを広げる魅力とか、見向きしていなかった人をこっちに呼び寄せるような、そういう誘引力がないといけないのかなと。観光施設として今後あそこに人を呼び込むには。そういった意味では、何がアピール材料というか、見向きもしていなかった人をこちらに向かせるというのは、あの館としてはどういう発信をしていくべきかなというふうにお考えなののでしょうか。

【市長】 敦賀の史実を伝えていくというのが一つありますけれども、それを子供たちに伝えていきたいのもありますが、ポーランド孤児にしてもユダヤ難民にしても、日本の国際貢献という部分で、戦前、戦中というのは、日本はナチスと組んだり、南京虐殺とか慰安婦問題とか、そういうことがあったかもしれないですけれども、そういう厳しいことを戦争中にはしたかもしれないけれども、普通の日本人は親切で優しくだったんだということを敦賀を発信源として世界に日本人というのを発信できないかなというのがコンセプトなんですけれども。

そういう意味では、そういうところは非常に今注目をさせていただいていますし、関係国の方々にとっても、素晴らしい大事なところだなということを改めて確認させていただいていますので、そういう意味では、何人来るかというところの数字を求めていくのは非常に辛いところがありますけれども、修学旅行とかずっと毎年、年代が変わってくれば、それを学びにくるとか、もしくは関係国の人たちがそこを必ず見たいというふうに思って、敦賀に来たいというふうに感じていただけるとか。そういう部分になっていったらいいなというふうに思っています。

【記者】 ありがとうございます。結構、伝えていきたいところというのは深いものがあるのかなというふうに今のお話を聞いて思ったんですけれども、それを現実的には海外はちょっと難しいと思うので、国内の市外、県外の人にもそういったメッセージを含んだ上で発信していかなければいけないのかなというふうに思うんですが、手段としてはどういったものを考えられるのでしょうか。

【市長】 あとは、ほかに赤レンガ倉庫もありますし、緑地で、今日から始まるんですけれどもミライエもありますし、あと日本遺産に認定していただいた北前船と鉄道遺産がありますので、そういうところを組み合わせながら、楽しさも含めて。それだけだと何か重苦しい雰囲気になってしまうと嫌ですので、勉強だけじゃなくて、楽しいものがあるというふうな発信ができて、あとは真鯛とかフグとかカニとか、おいしいものもあるよというので、総合的に来ていただきたいというふうに思います。

旧のムゼウムで感じたのは、映画があったりして、ぐっと入館数は増えるんですけれども、やっぱり下がるんですね。何で下がるんですかというのをバスガイドさんとかに聞く

と、自分たち、毎年大体同じような人たちを連れてくるんだけど、去年も来たね、おとしも来たねということになると、なかなか毎年は来れないと。ですから行く場所を少しずつ変えていかないと駄目なんですという話もありますので、そういう意味では、ムゼウムは2つのテーマがありますので、それぞれの可能性はあるんでしょうけれども、やっぱり総合的に魅力のあるまちにならないといけないというふうに思います。

【記者】 ありがとうございます。

【観光部長】 ミライエの試験点灯は明日です。

【秘書広報課長補佐】 予定の14時30分になりましたので、ご協力のほうをお願いいたします。

【記者】 最後に1問だけ。原子力の話に戻ってしまって恐縮なんですけれども。

もんじゅの敷地内に建てる試験研究炉なんですけれども、敦賀市にとって試験研究炉が必要だというふうにお考えになっておられるか。もしお考えになっていられるとしたら、必要だというところの必要性についてご説明いただいてもよろしいでしょうか。

【市長】 今、国にお願いしていますのが、試験研究炉、こういうものを造りますよという話が出ましたので、敦賀市にとってどんな経済的な、また人的なメリットがあるかということを示してくださいということをお願いしていますので、必要か必要でないかという議論は今はありません。

【記者】 例えば、もし仮に経済的なメリットがないという場合に、例えば望むものじゃないといったときに、それこそ建てる際にも、関西電力がやったように、もしも地元の理解というのは、同意ですか、理解というのが重要になってくるんですけれども、例えば拒否する場合などもあり得るのでしょうか。

【市長】 今、たればの話をする気持ちはありませんので、お答えできません。

【記者】 ありがとうございます。

【記者】 最後の金ヶ崎周辺についてなんですけれども、商業施設の計画が、業者の選定もまだ終わってはいないと思うんですけれども、これから最後のハード整備というか、つくっていくという状況にあって、市長の思いとして、どんな商業施設になってほしいなという期待感であったり希望であったりということがあれば、お伺いできたらと思うんですが。

【市長】 自分の気持ちとしますと、整然とした大きな施設ではなくて、いろんな人が雑多に市場みたいにわいわい言いながら、そこで物を売ったり話をしている場所がいいなというふうに思っています。ただ、コンサルの方が入ったりとかいろんなことの中で、私の意見は、その一部として、採用されるか採用されないかという世界に入っていくと思います。

【秘書広報課長補佐】 それでは、これもちまして11月の市長定例記者会見を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

午後2時32分 終了